

「Way 構文の修辭的事態描写」

中村 英江

(神戸女子大学 [院])

1. 導入—研究の背景・主張

➤ 2つのタイプの先行研究

- 「Way 構文が単独で描写する移動事象」に注目 (Goldberg 1995, 影山・由本 1997, 高見・久野 2002, 岩田 2012)

(1) Frank dug his way out of the prison. (Goldberg 1995: 199)

(2) He belched his way out of the restaurant. (*ibid*: 202)

(3) Alice Slade inched her way apologetically into the room. (影山・由本 1997: 177)

(4) With a violent thrusting movement of his powerful arms [he] pushed his way through. (*ibid*: 179)

(5) He begged his way north, ... until eventually in Turin the police picked him up as a vagabond.

(*ibid*: 173)

- ▶ Goldberg (1995): Way 構文の形式 ([SUB [V [POSS way]] OBL])¹自体が「移動」を含意し、意味を「手段(1)」と「様態(2)」に分類し、前者には「困難性」が伴うと主張
- ▶ 影山・由本 (1997): 3タイプ(「移動の様態(3)」「通路の作成(4)」「移動の随伴動作(5)」)に分類
- ▶ 高見・久野 (2002): 「主語指示物が普通ではない様態」で「徐々に移動する」等の機能的制約を提示
- ▶ 岩田 (2012): 時間幅のある移動を「長距離に渡る移動」を表す、と説明

- Way 構文の修辭性・文体的効果に注目 (外山 1968, 大室 2000)

- ▶ 外山 (1968): 「ヒネった言葉の使い方」が「直線的表現の現わし得ない微妙なニュアンスを出す」と説明し、その一例として *grope one's way* や *elbow one's way* を挙げ *make one's way* からの「ヴァリエーション」と捉えている
- ▶ 大室 (2000): 「One's way 構文には文体上、ユーモアな面と描写的な面があり、特に、言語使用者がそういった文体上の特質を生かすように、かなり意識して気をきかせてこの構文を用いる」(p.34) と述べ、「意識的使用」を示すために使用される動詞の特異的な使われ方について分析

➤ 本発表の目的

聞き手(読み手)の解釈の過程や、使用される言語的文脈を考慮することでこれまで見落とされていた Way 構文の特徴を浮き彫りにし、その過程で上記の2つの特徴の接点も明らかにする。

¹ SUB は主語、POSS は所有代名詞、OBL は方向表現を示す

主張点：

- Way 構文には、単純な移動事象の描写だけではなく、その移動プロセスにおいて移動主体に関連する何らかの出来事や経験が生じるという含意（以下、「Way 構文の含意」と呼ぶ）がある
- Way 構文の含意が談話上で主に次の2つの効果をもたらしている。
 - (i) 含意によって聞き手（読み手）の想像を駆り立てる
 - (ii) 含意の内容（の一部）を具体的に明示する別の節を伴う

➤ 本発表の構成

2節：2つの含意の効果について、先行研究の事例と *The Corpus of Contemporary American English* (以下 COCA) による調査と分析、3節：結語

2. 調査と分析—含意の2つの効果

➤ (i)：含意によって聞き手（読み手）の想像を駆り立てる

● 「移動主体が辿る経路の何らかの出来事や経験を表す」という含意が引き起こす様々な解釈について

▶ 「困難性 (difficulty) 」 (Goldberg 1995: 204)

(6) Frank dug his way out of the prison. (= (1))

▶ 「解釈の揺れ」

(7) He belched his way out of the restaurant. (= (2))

- Goldberg (1995) によれば Goldberg 自身は「困難性」は伴わないという判断であるが、人によって判断が分かれ、その解釈は聞き手（読み手）に委ねられる。

▶ 「経路が抽象的」な場合

(8) Julie Andrews has been singing her way into our hearts. (COCA 2014)

(9) He danced his way to a Golden Globe for his brilliant performance in “Chicago,”... (COCA 2014)

- 字義通りであれば「歌って我々を感動させた」や「踊ってゴールデングローブ賞を獲った」という解釈になるが、単に「歌う」や「踊る」の活動が繰り返されただけではなく、例文(8)だと「感動させる」には「ヒットチャートで1位を獲る」こと、それには努力もあり「困難性」も含意されるような、何らかの活動が関わっていることが認知的に想起される。
- 長い期間に繰り返された出来事を単一の（仮定の）経路に圧縮して表現しているため、経路を移動中の移動主体に様々な出来事が生じたという含意を伴うが、その出来事の内容は聞き手（読み手）の想像に委ねられる。

聞き手（読み手）に想像を駆り立てる効果→「直線的な表現では現わし得ない微妙なニュアンス」（外山 1968）あるいは「ユーモアな面」（大室 2000）

➤ (ii) : 含意の内容（の一部）を具体的に明示する別の節を伴う

- ① Way 構文は単独で文を成す事例に劣らず、複文や分詞構文の一部として生起する傾向が強い。
- ② 主に同時性を表すもの（as 従属節を伴う複文や、分詞構文）を好む。
- ③ ②の場合、主節は従属節（Way 構文が生起）で表される移動の内容をより具体的に描写する。

①と②について

	総事例数	複文（または分詞構文） で使用される事例数 ²	as 節と分詞節の事例数
make one's way (2010 – 2014)	1411	923 / 1411 (66 %)	413 / 923 (45 %)
push one's way ³ (2010 – 2017)	197	108 / 197 (55 %)	45 / 108 (42 %)
pick one's way ⁴ (2010 – 2017)	245	154 / 245 (63 %)	104 / 153 (68 %)

表 1 : COCA 調査に基づく Way 構文の分布状況

③について

▶主節が Way 構文の描く事態の移動主体が移動中に行った動作

- (10) As the president and vice president made their way out of a congressional luncheon today at the U.S. Capitol, they paused in front of a bust of Martin Luther King Jr. (...). (COCA 2013)
- (11) The Greek Chorus scattered, and I ran on from backstage, pushing my way through the scrum of actors. (COCA 2013)
- (12) Feingold nodded, picking her way carefully along the rough trail. (COCA 2017)

▶主節が移動中の移動主体の知覚・認識

- (13) I thought about it as I picked my way through the trees toward the RV. (COCA 2011)
- (14) As I made my way in that direction, I noticed a small table open beside them. (COCA 2012)
- (15) As she made her way toward the exit, she saw the two women from the parking lot. (COCA 2014)

² when, while, before, after, because などの従属接続詞内での使用や、接続詞 and のあとに Way 構文が続く場合の使用などを指す

³ push your way のみ事例数が少ないため 1990 – 2017 年の全時代の事例を含む

⁴ pick your way と pick their way は 2010 – 2017 年のみでは事例数が少ないため 1990 – 1994 年も含む

▶主節は移動中に移動主体に起こった出来事

(16) Making my way through the ditches and tents, I met a bitter young man with his chest bared (...).

(COCA 2014)

(17) Jake's head throbbed as he made his way to the toy department.

(COCA 2010)

(ii)のまとめ

- Way 構文が移動事象を表す一方で、主節はその詳細な情報を描写する。つまり 2 つの視点（移動事象を俯瞰する視点と移動事象内の移動主体の取る視点）が同時に想起される。
- この現象は一般性の高い移動動詞 (go や walk) による自動詞移動構文には見られない特徴であるため、Way 構文独自の特性であると考えられる。

➤ (i)や(ii)の事実は、Way 構文に「移動プロセスにおける移動主体に関連する出来事や経験の発生」という含意が伴うことを裏付けている

3. 結語

- ▶ Way 構文は単独で自律的に完結した移動事象の描写をするのではなく、その事象内で生じた別の出来事存在を想起するという意味機能を担う。つまり Way 構文は単一の移動事象を表すのではなく、複数の視点による移動事象の捉え方 (construal) を反映した構文である。これが、Way 構文には他の事象描写構文にはみられない独特の修辞性が伴う原因であると考えられる。
- ▶ 本発表が示す現象は、節レベルの「構文」を文脈から切り離し、かつ聞き手（読み手）の役割に注意を払うような分析をしない限りは捉え難い現象であり、単独で人間にとって基本的な場面を描写することができる単節 (simple clause) レベルの項構造構文の一つに Way 構文を含める考え (Goldberg 1995) は妥当とはいえない。

主要参考文献

- Davies, Mark. (2008-) *The Corpus of Contemporary American English (COCA): 560 million words, 1990-present*. Available online at <https://corpus.byu.edu/coca/>.
- Goldberg, Adele E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*, University of Chicago Press, Chicago.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Jespersen, Otto (1949) *A Modern English Grammar on Historical Principles, Part 3, Syntax*, Munksgaard, Copenhagen.
- Szczesniak, Konard (2013) "You Can't Cry Your Way to Candy: Motion Events and Paths in the X's Way Construction," *Cognitive Linguistics* 24, 159-194.
- 岩田彩志 (2012) 「way 構文はどのような移動を表すか？」 畠山雄二 (編) 『日英語の構文研究から探る理論言語学の可能性』 85-97, 開拓社, 東京.
- 影山太郎・由本陽子 (1997) 『語形成と概念構造』 研究社, 東京.
- 大室剛志 (2000) 「One's Way 構文の意識的使用について—Kirchner (1951) の観察を中心に」 『英語教育』 第 49 卷 3 号, 34-36, 大修館書店, 東京.
- 高見健一・久野暁 (2002) 『日英語の自動詞構文』 研究社, 東京.
- 外山滋比古 (1968) 『修辞的残像』 みすず書房, 東京.